552.9-N48ウ
1200500746490

七尾軍艦所沿革

附 七尾語學所

七尾市役所編

始

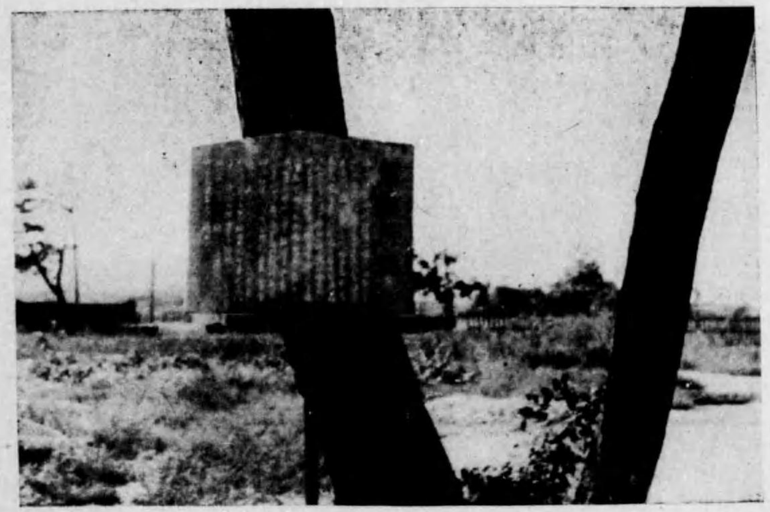
七尾軍艦所沿革

附七尾語學所

七尾市役所

917
378

552.9
N48



七尾軍艦所跡一部の風景

工業地帶と化したる軍艦所跡

識

七尾港は日本海沿岸に於ける天然の良港にして港域の雄大を賞讃する人多きも當港内に在りし加賀藩の軍艦所は我國造船所の濫觴であり、帝國海軍初期の基礎を出し更に一世の權威者多數を輩出したる史蹟を知る人殆ど稀なり、茲に於て當港は近時頓に振展し内鮮滿間に於ける交易上極めて重要性を認めらるゝに至る、當市來訪の人士幷に各方面の必要向に頒ち現今の七尾港實情御賢察を仰ぎ傍ら天下に此の軍艦所沿革と事蹟を傳へんと本書を著したるものなり。

本書編纂に際り鹿島郡誌・藩艦船小史・川崎造船所史・加越能史談會刊行物・中谷内氏所藏書籍を參考とし一面北國毎日新聞・日報社及び仲島北海氏等の協力を得たるものなり、然れ共著者薄學にして且時局と防諜を參酌し、江湖の期待に副ひ難きを諒せられんことを。

昭和十七年九月

著者識

917
37

七尾軍艦所沿革

文久年間より慶應年間に亙り英國軍艦を始め、佛蘭西軍艦及び亞米利加軍艦數度に渉り七尾港に入港、灣内測量、上陸視察を爲すこと頻りなるにより、前田加賀藩に於ても海防の急なるを悟り、七尾港内に軍艦所を設置し海防を嚴にし、異國船をして我藩領に對し一指も冒かせしめざるに至る。

今前田藩が設置したる七尾軍艦所當時の諸施設を見るに、文久二年前田藩は英國及和蘭國より汽船數隻を購入し、七尾港を以て碇繫地とし、購入船は悉く武裝し戰鬪の用に供すべく大筒を備へ威風堂々たるものなりき。

英蘭國より購入したる汽船は **(一)李白里丸** 鐵製、五百噸、百十馬力 **(二)猶龍丸** 鐵製、三百九十八噸、百馬力 **(三)錫懷丸** 鐵製、二百五十噸、七十五馬力、を主艦と爲し、補助艦艇として駿相丸・起業丸・有明丸計六隻にして七尾灣頭に砲壘を築造し防備嚴を極む。

七尾軍艦所は現在の七尾市矢田新地域にして俗稱海軍用地なり、軍艦所地域は凡そ一萬八千三百餘歩に及び所内に製鐵所を併置し、艦船の修理、船具の製造に當らしめ數棟

の倉庫には艦船所要の物品幷に兵器・彈藥・食糧を收藏し、進展の命令を傳承したり。

軍艦所の構成は大體軍艦奉行（現今鎮守府司令長官）の下に軍艦棟取（現今艦長）馬廻役（現今監視船隊）製鐵所（現今海軍工廠）語學所（現今海軍機關、兵學校併用）の四役をして分掌せしめ、明治維新前後約十年間加賀百萬石優藩の貫錄を以て梅鉢の藩旗颯爽として領内沿岸に飜かし、人皆之れを梅鉢海軍と稱す。

川崎造船所の前身

明治四年廢藩置縣と同時に軍艦所廢止せられ、所屬主艦等は維新政府に引繼がれ日本海軍横須賀軍港に移り我國海軍初期時代の重要使命に就きたりと。一方同所製鐵所設備の一部と艦船三隻は、加賀藩士**關安太郎**、當時の軍艦棟取**遠藤友次郎**、前田藩分家たる大聖寺藩士**石川嶂**の三人此れを讓り受け、兵庫川崎山（現在神戸市内引臼台場東北方）に移し**加洲製鐵所**と稱して船舶の修理、造船事業を開始したり、時明治三年五月なり。

後明治政府工部所に讓り渡し、明治十九年五月政府は之れを**川崎正藏**の手に移し、現今川崎重工業の父と稱せらるる川崎氏個人經營となり、所謂**兵庫造船所**時代是れなり、

明治二十九年株式組織として川崎造船所となる、昭和十四年十二月**川崎重工業**と改稱せられ今日に至りたるが、七尾軍艦所内製鐵所は其の前身なりとは知る人ぞ知る、現在川崎工業の造船能力と造船技術を思ふ時、轉感なき能はざるなり。

七尾語學所

明治二年八月加賀藩は藩士の育英と造船技術の習得と海兵學の研究の爲め壯猶館英學所の分校として七尾軍艦所内に七尾語學所を設置し、藩の秀才子弟三十餘名を入所せしめて主として英語、理化學、數學を授けしむ、藩は同所の教官に**英國人「チョージ・オースボン」氏**を招聘したり、「オースボン」氏は當時江戸に在りて旗本某氏の娘を妻となし居たるが前田藩の招きに應じ七尾に來り藩の子弟教育に專念したり、時に「オースボン」二十七歳、後語學所廢止と共に外務省囑託を命ぜられ勳五等に叙せられたるが明治二十二年憲法發布記念に際り勳三等を追叙せられたりと云ふ。

「オースボン」氏は一八四二年「ロンドン」に生れ、我國よりロンドンに歸り一九〇五年歳六十三にして逝去す、現在七尾市内眞言宗妙觀院境内に在る**牛塚**は、七尾語學校教

官時代同人常食の牛肉に當てたる屠殺牛の靈を供養し、此所に塚を建立したるものなり。

七尾語學所出身者にして後世名を成したるもの多く、就中我海軍の先輩海軍**大將瓜生外吉**、樞密顧問官理學博士**櫻井錠二**、鐵道院總裁工學博士**平井晴二郎**、貴族院議員工學博士**石黒五十二**、理學藥學博士**高峰讓吉**各先生の如き一世の權威者を輩出し、現在「オースボン」と共に皆故人となり、現在同所の跡は新興七尾の中心地にして〇〇製作所等の工場地帶と化し當時製鐵所及び語學所兵器倉庫境界に植樹したる松樹は天を摩す大樹と成り、城山瓢の松籟は七尾灣頭に衿し當時を偲ぶに足るものあり。

昭和十一年七尾日產化學工場の日本化學工業株式會社長の長男田中壽一氏七尾に來り此の語學所の話を聞き同十二年渡英する日本硫曹の西岡技師に「オースボン」の記錄調査方を依賴したる處、西岡技師は同年二月六日英國チント洲に於て「オースボン」の令息に會見し七尾教官時代に撮影したる寫眞（和服帶刀姿）及び外一葉を預りて歸朝され現在市役所に保管中なり。

七尾語學所教官時代明治二年七尾ニ於テ撮影ニ係ル

「オースボン」氏勲五等佩用横濱市鈴木寫眞舘撮影ス

註譯

一、慶應年間異國船七尾入港の重なる船

(一) 慶應三年五月二十六日英艦「セルベント」號、艦將「プロック」以下士官十二名

乘組員百名餘

(二) 同年六月十二日亞米利加艦「シヤナトー」號、艦長「コルツプオン」乘組員二百八十名

(三) 同日佛艦「ラプラース」號、艦將「コマンダント・カメツト」乘組員二百名

(四) 其他英艦數隻入港、七尾港灣測量及び上陸して附近調査視察したるもの

二、當時前田藩の對策

異國艦船突如入港に驚き、先づ藩より里見亥三郎早打ちにて來尾し、續いて本多播磨守五萬石を始め長大隅守三萬五千石、奥村伊豫守一萬七千石等六家老及び公御役人御目付湯澤兼太郎等七尾に乘り込み、七尾一本杉津田嘉一郎（現在大森玉木氏宅）方に陣取り海防本部として諸般の警戒案内事務を掌り、當時の十村中谷内氏等に對し外人の案内接待を下令せるものなり。

三、七尾軍艦所の功績

北越戰爭當時維新新政府より前田藩に對し兵員の應援、軍需品輸送を下命されたるを以て前田藩は此の時ばかりと七尾軍艦所の全力を擧げて兵員、軍需品の輸送に當りたり

當時討幕艦隊薩摩藩の乾行丸、長州藩の丁卯丸は佐渡に潛伏せる幕府の軍艦順動丸攻撃に出動し、七尾軍艦所を兵站基地として艦船の修理、食糧、彈藥、燃料の補給は悉く七尾港を利用し、加賀藩の討幕艦船と共に大いに活動し大軍港の觀を呈せり。

維新政府に於ては北越戰爭に於ける七尾軍艦所の殊功を嘉みせられ、明治二年六月二日朝廷より賞祿壹萬五千石を下賜せらる。

四、前田藩英國より購入したる船價

英蘭より購入船は横濱、長崎に於て購入したるものなるが、主力艦中の猶龍丸（鐵製長三十三間、幅四間二尺、三百九十八噸、百馬力帆柱二本、煙突一本）は明治元年八萬ドル、當時の邦貨約貳拾萬兩ならん。

五、七尾軍艦所時代の造船技術

北越戰爭に際り、七尾軍艦所最大軍艦李白里丸輸送中、機關に故障を生じ百方盡せども運航不能なるより藩主は江戸留學中の藩士淺津富之助に急々歸藩故障艦の修理を命ず。

藩命を受けたる富之助は師**大村益次郎**に此の旨を告げたるに、大村益次郎は英書舶用

機關と題する原書を貸し與ふ。富之助原書一冊を携へて所謂早打ち七尾に到着し、英書を譯讀しつゝ機關室に立ち籠り遂に故障を發見、修理を完了就航せりと云ふ。

六、七尾軍艦所は鹿兒島兵器所の前身

七尾軍艦所內の製鐵所は一部は今の川崎造船所の濫觴を爲し、又其の一部は**西郷隆盛**の右腕**桐野利秋の弟桐野利邦**は七尾軍艦所の製鐵所長にして現在海軍工廠長の地位に在り、明治八年同所に於て海軍大輔河村純義と相談し、同所の機械と設備を鹿兒島に移し鹿兒島鎭臺の兵器火藥製造所となす。

明治十年西南戰役起るや西郷軍私學徒は最初に之れを奪取し、豐富なる兵器火藥の威力は遂に熊本城包圍戰となる、噫!!! 明治十年三月より十月に至る國內大戰爭の西郷軍銃砲火力の前身は七尾軍艦所とは知る人ぞ知る。當時桐野氏より七尾の知人福島與兵衞に當てたる書翰に因り明かなり。

七、亞米利加艦「シヤナトー」號投錨地と現在

慶應三年六月亞艦「シヤナトー」號は小島沖合に碇泊、測量に着手せんとして加賀藩を振動せしめたる地点は、現在石川縣〇〇第三訓練所となり、其の西北は七尾〇〇の

工場と海國日本の〇〇道場の威容を望むに至る感亦深し。

八、七尾造船所廢止通達

事三　第二百套第二百九十四號　　海軍省

當省所轄七尾造船所之義相廢止し候に付諸機械物品他港へ引移し濟之上は同所諸主船寮官員爲引拂候に付ては存置之建物及地所とも有形の儘其縣へ相預け取締向番人付方共都而依托致度右差支無之候はゞ官員引拂之節引渡方可爲取計と存候條差支有無共至急何分之義被申越度候也

明治九年四月廿六日　　海軍省

九、加賀藩「オースボン」を招きたる理由

「オースボン」氏は二十幾歲にして日本に渡り、日本好きの青年學者にして當時横濱に居住したり。「オースボン」の妻は江戸旗本某氏の娘を娶りたる爲め、攘夷派を避けんと江戸遠く居住を希望し居たる所偶々加賀藩語學所を設置し其の教師を求めんとするに一致しはるばる七尾に來りたるものにて、横濱より七尾に來る途中攘夷派の危險を慮り武士十數名護衞附にて七尾に赴任せりと。

昭和十七年十月廿五日印刷
昭和十七年十一月五日發行　（非賣品）

編輯兼發行人　石川縣七尾市橘町三二
市役所内　橘　次郎

印刷者　金澤市高岡町九十番地
（中石二八）高橋覺吉

印刷所　金澤市高岡町九十番地
明治印刷株式會社

917
378

製本控

冊數	1冊	號	
七尾軍隊所沿革			
備考			

年　月　日

917
378

終